

FTAを避ける英語のストラテジー

津田早苗

Brown & Levinson (1987) は、待遇表現としての politeness は普遍的なものであると主張している。しかし、堀 (1996)、津田 (1994: 131-149) など指摘しているように、英語圏と日本における politeness の概念には差がある。おおまかに言えば、英語圏の人々にとって、気安さ (friendliness) が politeness の大切な表現の一つであるのに対し、日本において politeness は敬語とも訳されるように、ていねいな表現 (formality) と強く結びついている。

私たちは対人関係において、相手に不利益なことを言わなければならない場面、お互いの意見が一致しない場合などに遭遇すると、そのような FTA (Face Threatening Act — 相手のフェイスをおびやかすような行動) を避けるための strategy をとらざるを得ない。当然なことであるが、英語圏の人々が、FTA の関与するあらゆる状況で、言いたいことを率直に述べているわけではない。しかし、英語圏と日本では、FTA を避ける strategy に関しても異なるのである。

FTA を避けつつ言いたいことを表現をするための一般的な strategy は、間接表現である。婉曲に表現し、相手に察してもらうのが日本的コミュニケーションであるというのが定説となっている。英語圏の人々は、ギリシャ・ローマ時代以来のレトリックやシェークスピア劇に見られるような多彩な比喩表現などを言語的な遺産として所有しているので言語による表現が一般的に得意である。日本とは異なり言語に表現することを重要視する英語圏の文化において、FTA にどのような対処するのであろうか。

Grimshaw (1990) は、さまざまな対人関係における対立を扱った論文集であるが、その中で Eder (1990: 76) は、相手に悪態をつき、言われた相手も負けずに言い返す ritual insult をとりあげている。

Boy: All these girls are dogs!

Tricia: Oh, but you're a real fox.

この対話において、Boy は「女はみんな犬 (悪) だ」と言ったものの、「でも、あなたは本当に狐ね (かしこいわ=ずるいわ)」という Tricia のことばに対して言い返すことができない。このやりとりに関して Eder は、Tricia が Boy の ritual insult に対して同じような表現を使い、相手の自尊心をくすぐり、皮肉をこめることによって相手より優位にたっていると説明している。このような機転やユーモアによって Tricia は自分の face を保持し、FTA を positive politeness によって処理したと言えよう。Eder は、一般的に女性性は、Tricia のように上手に言い返すことが期待されている ritual insult に慣れていないと指摘している。

同じ論文集の中で、Tannen (1990) は、Harold Pinter の劇 *Betrayal* の中で、登場人物が自分の相手と対立する考えをのべることなく、沈黙によって相手に対処する例をあげている。また別の所でも (1989)、他の人に言うべきことを残しておくためにも、言わなくてもよいことは言わないでおく、という点で沈黙の重要性を指摘している。

今回のワークショップでは、ここにあげたような英語の FTA の対処の仕方を考察し、日本語と比較する。